

夜想曲

ジェットは目を覚ました。天井の木目が視界に入る。固いベッドの上に寝ている。身体の向きを変えると、椅子の上に置かれた彼のARMとジャケットが見えた。灯りはついたままだった。自分もジャケットを脱いだだけの、シャツとジーンズといういつもの服装。

汗をかいていた。あまり気持ちのいいものではない、嫌な汗。

記憶を探る。

仕事を一つ片づけ、安宿に入ったのが……今日の夕方だ。食事後頭痛を感じ、部屋に戻ってそのまま寝てしまったのだ。

まだかすかに頭が疼くが身体を起こし、窓に近寄る。

ガラス窓を開けると、予想以上に冷たい空気が入ってきた。階下の食堂から明かりと人々のざわめきが届く。

眠ってからまだそれほど時間が経ったわけではないようだ。

窓を閉め、ゆっくり部屋の中を見渡す。

棚の上に置かれた水差しに目が留まる。のどが渴いている。水差しを手に取りグラスへ水を注いだ。口をつけると、

相当のどが渴いていたらしく一気に半分ほど飲んだ。

ジェットはグラスから口を離し、再び部屋の中を見る。

特に何も異常はない。

階下からはかすかに人の声。部屋の両隣からは何の音もない。片側の部屋はギャロウズ。クライヴとまだ飲んでる最中だろう。下の食堂か、或いは河岸を変えたか。

もう片方はヴァージニア。クライヴたちが下の食堂なら一緒かもしれない。二人が外に出たとすれば、あいつだけは部屋に戻っている可能性が高い。

ジェットはグラスに残っていた水をゆつくりと飲んだ。違和感を感じる。水にはない。この部屋の空気に？

いや、違う。それだけじゃない。

何もかもがおかしい。何だ、一体。

不意に寝ている時に見ていた夢の内容を思い出した。

「お前はこの世界のものじゃない」

誰の声でもない声がジェットを弾劾していた。

「お前は人間じゃない」

判つてるさ、そんなこと。

「ヒトではないものがヒトの振りをするのか」

その台詞には覚えがある。かつての記憶だ。

ジェットの口の片側が上がる。それで別に不自由していいわけじゃない。これまでもそれでやってきた。

なのに今、世界が遠く感じる。